

脱青年期の娘から見た向老期の母親との母娘関係
－娘がサブカルチャーを趣味に持つことの機能に焦点を当てて－

立命館大学大学院
応用人間科学研究科
臨床心理学領域 家族機能・社会臨床クラスター
藤井 彩瑚

本研究では、①「向老期の母親を持つ脱青年期にある娘が、母親との間でどのような葛藤を感じ、それらにどのように対処しているのか」②「母娘間で共有し難い趣味を娘が持つことが、母娘関係にどのような影響を及ぼすのか」の2つの研究疑問に基づいて、母娘間で共有し難いとされる趣味の1つであるサブカルチャーの趣味を持つ娘に焦点を当て、これらを明らかにすることを目的とした。向老期の母親を持ち、サブカルチャーの趣味を持つ22～30歳の女性8名に半構造化インタビューを行った。分析にはM-GTAを用いた。

その結果、自立が課題となる脱青年期に入った娘は、母親の期待に沿うという固定化された関係に息苦しさを感じていた。さらに、少子高齢化という社会の流れによって、母親の老化に伴い、自立を課題とする時期の娘が向き合う課題が重なっている。そのため、母親が自身の老いに対して感じる不安が娘の予期不安につながり、母親の老いや変化が自立の妨げになるようにも感じられ、複雑な葛藤を抱えると考えられた。よって、この発達段階にある母娘関係には、互いの個別性を意識化させるものが必要となる。また、母娘間においてサブカルチャーという共有しない趣味を持つことは、母娘に相互の個別性を意識化させるために機能し得た。サブカルチャーの持つ魅力は、個人の性格や人生観を変容させることが可能であり、その力が関係の変化にも作用していると考えられる。